

人生の先輩方からの教え

それは、日々、利用者の方と接する中で、気づかされ学ぶことがたくさんあります。それは、心に響くあたったかいものでした。



「なつかしいの〜」しげんに笑顔 / 福井市 市波町『美山楽々亭』にて

家族のぬくもり

春を感じられるようになった3月のある日、足羽利生苑デイサービスセンターの利用者の方々と、福井市市波町にある『美山楽々亭』へ出かけたときのことです。施設中央の部屋に入ると、趣のある『いろり』が目にとびこんできました。とても興味深いものだったので、どのように使っていたのかを80代の利用者の方に聞いてみました。

「昔はガスがなかったでの。いろりて火焚いてご飯を作ったり、暖をとってたんやぎ」

「ほやほや。男の人はよこ座（いちばん奥の良い場所）に座るけど、女の人はなべ座（食事の準備をする場所）に座るで、忙しかったの。子どもん時は、食事中きちんと正座して静かに食べるよう、よう怒られたわ。食事が終わったら家族全員で集まって、いろりを囲んでおとぎ話や学校の話をしたもんやの。なつかしいの〜」

「いろりに使う薪も、学校終わったら親と一緒に山に取りに行ったの。うちの仕事やったで」

笑顔で話される利用者の方の話を聞いて、わたしはとても考えさせられました。

昔は現代のように電化製品はほとんどなく、一家にひとつのいろりで食事も暖もとっていたので、不便なことたくさんあったと思います。けれど、一つしかないいろりを囲むことで自然に家族団らんの時間がとれていました。

また一家のために一生懸命働く精神、目上の人（お年寄りや両親）を敬う心や、人としての礼儀・態度などのしつけも、一緒に過ごす時

間があつたからこそ、親から子へ厳しく確実に伝えることができたのではないのでしょうか。

時代は変わり、生活スタイルも便利になりましたが、それに伴い、家族と過ごす大切な時間を共有することが、昔よりも少なくなつたと感じます。利用者の方の会話から、家族のあり方をもう一度見つめ直し、家族間の絆を深めていきたいと思ひました。

なんでも教えてあげるさ〜



「もったいない」

ある日の利用者の方の会話です。

「戦時中は物がなかったでの。苦手な食べ物があっても残さず食べたもんや。今はたくさん食べ物を毎日のように捨てて、もったいないの」

「鉛筆一本でさえなかなか買ってもらえず、みじかくなるまで使ったんや。今ではこの鉛筆は誰が作ったのかさえ考えることなく捨ててしまっ。物のありがたみがわかる人は少ないかもしれんの。」

『もったいない』という言葉にハッとしました。私たち職員は利用者の方とふだん接している中で、物を大事に使うことの大切さを教えていただいているのです。

ある利用者の方の服の裾の部分が、黒い糸で繕われているのを見つけてきました。良く見ると、

両方の裾と丈の部分も同じように直されていました。「お

ばちゃん直したんや」と、利用者の方はくしゃくしゃの笑顔で自慢げに話されていました。古くなったからすぐ捨てたり、新しい物を買ったりするのはなく、ひと手間加えて長く使い切ることの大切さを感じました。

また、多量のチラシを使って、利用者のみなさんでくずかごを作ってくださいました。このくずかごは、デイサービスで毎日使用しています。



簡単にできるの～

夫一つでチラシも便利なのに生まれ変わります。

古くなって使いにくそうな財布やかばんも、大切に使われています。その方の思い入れもあるでしょうが、物があふれるこの時代では、なかなか真似のできないことではないでしょうか。

昔は物がなく苦勞の多い世の中でしたが、不平不満を言う人は少なく、我慢をする根性をみながつけていたと、利用者の方はおっしゃいます。生活は豊かになっても、先人の強い精神は忘れずにいたいものです。

利用者の方は年齢を重ねることだけでなく、生きることを習得、体験し、生きる知恵を身につけておられる「人生のすばらしい先輩」です。その先輩方から学ぶ「日本の心」をしつかり受け止めて引き継ぎ、今後の人生の糧にして、あたたかい心を持ち続けていきます。

みんなの広場

こんな人いますよ



本谷家全員集合!! 前列は公男さん(父)と成美さん(母)。後列左から翼さん、真心さん、紅葉さん、優華さん、明日香さん。

足羽利生苑で勤務している矢内優華さん(旧姓・本谷)。のだめカンタービレ最終楽章「のだめカンタービレ」最終楽章 トーベン交響曲第7番」演奏コンテストに一家7人で出場し、最優秀賞に輝きました。家族全員で一致団結し行った演奏は、たくさんの人に感動と元気を与えてくれました。

矢内さんの頑張りは、足羽利生苑でもたくさんの方の利用者の方を励まし、笑顔を引き出してくれています。



フジテレビより 演奏コンテストの表彰式 平成22年4月